

山辺の里

一

山辺の里は松本の
一里東にへだたりて
人口八千有余人
家数は一千三百戸
田畑は広く地味肥えて
暑さ寒さも強からず

二

晨に星をいただきて
夕に月のかげを踏み
人生業をいそしめば
みのる五穀も豊かにて
蚕飼のわざもうち開け
簞細工の名も高し

三

五層の楼の白壁は
往来の人の目を照す
窓より洩るオルガンの
調べに耳をかたむけて
やさしき歌の声聞くは
学べる子等の親ならん

四

雨ひややかに裾を打ち
吹雪は襟をかすむれど
おじず厭わずいそむと
東 西より集い来て
千にも余る幼な子が
ここにも摘むなり教え草

五

巽を見れば矛杉の
雲の凌ぎて立つところ
須々岐の宮居神さびし
今猶残こるひととの
片葉の薄穂に出でて
花の袂に人を呼ぶ

六

諏訪の工匠がきざみたる
竜のうろこは年を経て
のみの香残る屋形船
笛に鼓の音を合せ
瑞穂を神の広前に
ささげて祝う秋祭り

七

霞と共に消えていく
春の光を引きとめて
咲くや千尋の藤かつら
花紫に匂ひては
世に時めきし佐保姫の
神の名残りを見するかな

八

松が枝老ゆる兎川寺の
壁に朝日のかげやけば
蕙の霜の消ゆるごと
罪も汚れも失せ果てん
庭のかなたの頌徳碑
美名も残らん後の世に

九

乾の方に進みつつ
新井を過ぎて下金井
つづく麦畑桑畑の
その中道をとめ行けば
春の光は野にみちて
み空に歌う揚雲雀

十

董摘みつつ荒町の
西をよぎれば北小松
八坂の宮をふし拝み
薄磧 に来てみれば
岸の並木はものふりて
川上遠くかすむなり

十一

南小松を打ち過ぎて
林の南千鹿頭の
山にのぼりて見渡せば
錦を布ける深志野や
西に乗鞍槍ヶ岳
雪は斑に消え残る

十二

彼の光政が獲たりてふ
昔懐かしき兎田や
木の間に見ゆる広沢寺
浮世の塵をよそにして
法の燈火あきらける
心の闇を照らすなり

十三

畑に暮るる大嵩崎を
松の葉越しに見下して
三つ四つ残る 礎に
遠き昔を忍ぶとも
返すよしなき葛の葉の
恨みも高き金華山

十四

ああ小笠原清宗が
築きし城の跡いづこ
草茫茫と生ひ茂り
露の玉散る秋風に
虫の鳴く音も乱みだれつつ
千々に心を砕かしむ

十五

麓の流れ月澄みて
河鹿鳴くなり籠の鼻
松の嵐のさわぐ夜は
夢路危うき橋倉や
秋葉の山の裾つづき
家まばらなり南方

十六

大菱沢を右に見て
行けば名高き発電所
蚕種蔵むる風穴は
南の山のふところに
舟の 纜 巻けりてふ
船附石は村外れ

十七

これより東宮原に
つづく山口一ノ海
小仏過ぎて山の神
更に進めば大仏
大和合の宮の青葉蔭
湧きて流るる岩清水

十八

人気稀なる牛立の
里をあはれと見返りて
桔梗咲く道越え来れば
五丈にあまる大滝の
音は高嶺にひびきつつ
雨を催す地獄谷

十九

人里遠く離れ来て
扉のみ湯に宿かれれば
軒端に迫る雲の脚
尾上に迷う鹿の声
塵のこの世を遠ざけて
何れか哀れならざらん

二十

八伏山に登り行き
立ちて南を眺むれば
鏡の如き諏訪の湖
うみは緑に風風ぎて
水に映ろう富士の嶺の
上を過ぎゆく真帆片帆

二十一

立科山を打ち仰ぎ
佐久の平を望みつつ
攀(よ)じ行く先は雄鷹山
袖に触わるやをみなえし
袂に散るや萩の花
手折に惜しき 藤袴

二十二

秋 美が原に来て
寒紅梅の実を採りつ
彼方の空を眺むれば
碓氷峠の北の方
浅間の山に立ち昇る
烟は黒く又また凄し

二十三

造化(たくみ)の斧に削られし
絶壁 三千九百尺
時には白き雲を呼び
時には紅き虹を吐く
若し夫れ 旭日のかがやかば
想像(おもい)あがらん王が鼻

二十四

これより西の山つづき
武石峠の峰見えて
三角台の立つあたり
間近く月を仰ぎつつ
草を枕に学生が
露嘗せし夜も多からん

二十五

伊達の河原の朝ぼらけ
石切る鑿(のみ)の音寒し
呼べばうちつけ答えるに
木魂巖とは名づけけん
あたりの原は広くして
北に連なる堀が沢

二十六

三千町歩の山々は
野火つく草に任すれど
学びの庭の教え子が
十年此かたに植え付けし
落葉松今は長け伸びて
昼猶暗き菖蒲沢

二十七

谷の流れに沿ひ来れば
茅葺見ゆる上手町や
薩摩の守の城の跡
訪ぬる人のかけ絶ええて
入相告ぐる鐘の音も
雪に暮れゆく徳聖寺

二十八

原や奈良尾や厩所
朝餉の烟りいとしげし
分教場を右に見つ
三反田おりて大手坂
竹之下道分け行けば
包むに似たり包石

二十九

中村越えて千手なる
観音堂に詣づれば
ひともと銀杏枝たれて
赤木の池の水底に
つもる落葉もいと深く
やどりかねたる星の影

三十

木曾義仲が黒駒の
蹄にかけて乗り出でし
駒越あたり霧こめて
昔を忍ぶよすがなく
夕暮里をさまよへば
鶉 鳴くなり草がくれ

三十一

小高き丘の寺所を
よそに見ながら桐原や
心の色のもみぢ葉に
その名も高き天神の
宮の御前にぬかづけば
ひとしほ匂う夕日影

三十二

色づきそめし柿の実の
梢にあかくむすぶとき
葡萄の房の 紫に
透きて葉蔭にかかる時
見よ暖けき小春日の
光は星にあまねきを

三十三

大蔵山のいただきに
記念を残す城のあと
関の岩角ふみ鳴らし
勇みて山を出でにけん
駒のいななきかき絶えて
草葉にすだく轡虫

三十四

鶯うた朝ぼらけ
霞たなく夕間暮
春 長閑なる桐原に
梅かぐはしく咲き出でて
朧月夜花の蔭
調ぶるもおもしろし

三十五

北追倉の山もとに
残る昔の人穴や
竹の葉 茂る 篁(たかむら)を
過ぐればここは上金井
矢崎を越えて松かげに
斧の音聞く藤井山

三十六

束間の里や湯の原に
めぐりて来れば其の昔
重之朝臣が詠まれけん
わくにかかれる白糸の
くる人ひと絶えぬ賑はしさ
その言の葉ぞ誠なる

三十七

湯浴みする人一年に
其の数五万二千人
久しく悩む煩らひも
いか程ほど重きいたづきも
湯気の烟におこたりて
寝ざめうれしき朝ぼらけ

三十八

仙液山によじのぼり
すぎ来し方を眺むれば
実に麗はしき山川よ
ああ此の里に生まれたる
学びの友よ世のために
勉め励みて尽くせよや